

「冷静さと情熱」を教育研究に

熱い教育論争が繰り広げられています。教育は、国の根幹を創ります。教育の現状が国の将来を規定するとしたならば、もっと教育問題が熱く語られてしかるべきです。

いまから20年程前、アメリカでは未曾有の教育論議が展開されました。その火付け役は、1983年に出された『危機に立つ国家』です。当時のベル教育長官が委員を任命し立ち上げた「教育の優秀性に関する全米審議会」によってまとめられたものです。

報告書では、特に青少年の学力低下問題に焦点をあて、現状を分析しながら、教育の危機は国家の危機であることを訴えます。社会は、新しい世代が古い世代を追い抜くことによって、発展していきます。その新しい世代となる若者たちの学力が、20年以上にわたり低下し続けているというのです。まさに国家の危機です。

その教育をどう立て直すか。報告書では、5点に絞って具体的な提案を行い、その後に「アメリカはそれができる」と国民を勇気づけ、「父母と学生・生徒諸君へ」と直接メッセージを送っています。周知の通り、その後の教育改革は、急激に進むことになり、さまざまな分野で成果をあげています。

いま、我が国の教育界は、このときのアメリカの状態とよく似ています。『危機に立つ国家』の問題提起からどのようにして教育を立て直してきたのか、その実態を見る中から、われわれ教育研究者としての使命も見えてくるように思います。

学力の育成は、教育の原点にかかわります。学力問題を狭くとらえるのではなく、豊かな人間形成という広い視野からとらえなおすことによって、教育全体の改革へとつながっていきます。それは、国家の課題であると同時に一人一人の課題でもあります。危機意識をあおるだけではなく、それを克服する希望と勇気を喚起する理論や具体的方法を、冷静さと情熱をもってともに追究していく中で、大きな成果が生まれてくるといえます。

教育研究には、冷静な分析眼が必要です。しかし、それだけでは教育界に貢献することはできません。使命感をもって、情熱的に、かつ前向きに課題に取り組む姿勢が必要です。どのようなテーマであっても、自らの使命感と現実の教育問題と格闘しつつ追究していくことによって、より価値ある教育研究論文を書くことができます。本号に収録されている論文は、そのようなものばかりです。

皆様方に広く読んでいただけることを、心より願うしだいです。

(初等教育学科長 押谷由夫)